

# 大原C遺跡1

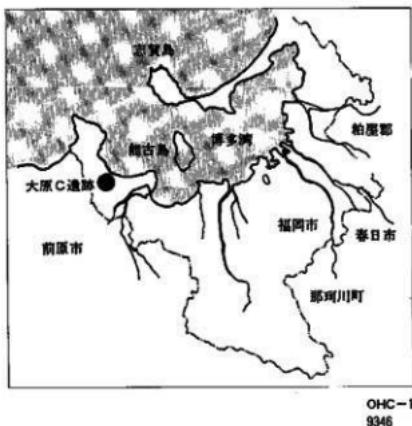
——大原C遺跡群第1次調査の報告——

1995

福岡市教育委員会

OO BARU  
**大原 C 遺跡 1**

—— 大原 C 遺跡群第 1 次調査の報告 ——



OHC-1  
9346

1995

福岡市教育委員会

## 序

北方に広がる玄海灘の海を隔て大陸と面した福岡では、人、物、文化の交流が先史時代より絶え間なく続けられてきました。この地の利、歴史を踏まえ現在の福岡市は「海と歴史を抱いた文化の都市」、「活力あるアジアの拠点都市」をめざし町づくりを進めているところであります。教育委員会においては、こうした町づくりの一環になりうる文化財保護と活用に努めています。さらに、多様な開発でやむなく消滅してしまう埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存を講じて後世に残そうと考えています。

今回の発掘調査は、美しい海岸線を前面に見下ろす大原の丘陵に位置し、中世の遺構を主とした遺跡が発見されました。出土した遺物のなかには中国産の陶磁器も含まれ、当時の人々による海を介した密接な交易が想像されます。また、近くの柑子岳には山城跡が確認されていますので、戦国の世における当地の役割も注目されます。

本書においてはこうした調査成果を収めたもので、研究資料とともに埋蔵文化財に対する御理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に、調査に際し御協力頂いた、地元、工事関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 尾花 剛

## 例　　言

1. 本書は福岡市西区今津3750-1外の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は荒牧が担当し、本書の執筆を行なった。 6. 石器の項は杉山が行なった。
3. 本書掲載の遺構、遺物実測、写真撮影は荒牧が主に行なった。石器実測は杉山に依頼した。
4. 処理は井上加代子、山崎賀代子、荒牧、屋山が行なった。石器は杉山に依頼した。
5. 本書掲載の実測図、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用していく予定である。

## 凡　　例

1. 本書掲載の遺構図は国土座標を使用し、方位は座標北である。
2. 掘載図面のアミ掛け部分については各個別に説明を加えている。
3. 本書使用の遺構名は溝を S D、掘立柱建物跡を S B、竪穴住居跡を S C、柱穴を S Pとする。  
番号は通して記したがIII区は100番台から、後に復元した掘立柱建物跡等、調査後に番号を付したもののは200番台から記した。

遺跡調査番号	9346	遺跡略号	O H C - 1
調査地地籍	西区今津3750-1外	分布地図番号	128-A-3
調査対象面積	1,700m <sup>2</sup>	調査実施面積	1,700m <sup>2</sup>
調査期間	1993年10月28日-1994年1月24日	事前審査番号	5-1-25

# 本文目次

Iはじめ	1	SD040	13
1 調査の経過	1	SD041	13
2 調査体制	1	SD042	13
II位置と環境	3	SD206	15
1 地形	3	SD052	15
2 歴史的環境	3	SD024, 025	16
III調査の記録	5	獨立柱建物跡	16
1 調査の概要	5	SB201	17
2 調査の方法	5	SB202	17
3 I区の調査	5	SB203	18
清	8	SB204	18
SD01	8	壁穴住跡	18
SD02	8	SC014	18
SD04	10	II区北端包含層	22
SD05	10	5 III区の調査	24
獨立柱建物	12	SD101	25
SB61	12	SD102	25
SB62	12	柱穴	26
4 II区の調査	13	SR103	27
清	13	6 大原C1次出土石器	28
		7まとめ	33

# 図版目次

Fig. 1. I区丘陵全景(東北から)	1	Fig. 25. SC014完掘状況(南東から)	19
Fig. 2. II区丘陵部(北から)	1	Fig. 26. (1) SC014壁溝内遺物出土状況	20
Fig. 3. 周辺測量分布図(1/25,000)	2	Fig. 26. (2) SC014内中央炉・壁完掘状況	20
Fig. 4. 調査地点位置図(1/4,000)	4	Fig. 26. (3) SC014内土壌(034)完掘状況	20
Fig. 5. I区緩斜面土層断面図(調査区西壁、1/40)	5	Fig. 27. SC014土遺物実測図(1/2, 1/4)	21
Fig. 6. 調査区周辺測量図(1/1,000)	6-7	Fig. 28. II区北端構配図と土層断面図(1/100, 1/60)	22
Fig. 7. SD01, 02断面図(1/60)	8	Fig. 29. II区最北端包含層遺物出土状況(西から)	23
Fig. 8. I区完掘状況(東北から)	8	Fig. 30. II区最北端包含層出土遺物実測図(1/3, 1/4)	23
Fig. 9. I区遠構配図	9	Fig. 31. III区遠構配図(1/100)	24
Fig. 10. SD02完掘状況(北から)	10	Fig. 32. III区完掘状況(東北から)	24
Fig. 11. SD01, 04出土遺物実測図(1/3)	10	Fig. 33. III区調査区東壁上層断面図(1/60)	25
Fig. 12. SD02出土遺物実測図(1/3)	11	Fig. 34. III区調査区東壁土層	25
Fig. 13. SB061, 062実掘図(1/60)	12	Fig. 35. SD101, 102土層断面図	25
Fig. 14. SB061, 062完掘状況(北から)	13	Fig. 36. SD101, 102出土遺物実測図(1/3)	26
Fig. 15. II区遠構配図I(南端、1/200)	13	Fig. 37. SE101実掘図(1/40)	27
Fig. 16. II区遠構配図II(1/200)	14	Fig. 38. SE101出土遺物実測図(1/3)	27
Fig. 17. II区完掘状況(北から)	15	Fig. 39. SE103弁筒(桶持)検出状況(南から)	27
Fig. 18. II区北半部完掘状況(北から)	15	Fig. 40. 調査区内出土石器実測図(1/1)	29
Fig. 19. SD042, 024, 025断面図(1/60)	16	Fig. 41. 調査区内出土石器実測図(1/1)	30
Fig. 20. II区SD101出土遺物実測図(1/3)	16	Fig. 42. 調査区内出土石器実測図(1/1)	31
Fig. 21. SB201, 202実測図(1/60)	17	Fig. 43. 調査区内出土石器実測図(1/1)	32
Fig. 22. SB201, 202完掘状況(北から)	17	Fig. 44. 2号墳現況測量図(1/200)	34
Fig. 23. SB203, 204実測図(1/60)	18	Fig. 45. 2号墳現況(東から)	34
Fig. 24. SC014実測図(1/60)	19	Fig. 46. 出土遺物写真1	35
		Fig. 47. 出土遺物写真2	36



Fig. 1. I区丘陵部全景(北東から)

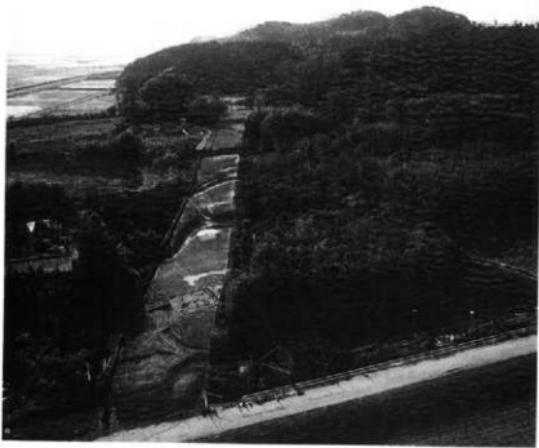


Fig. 2. II区丘陵部(北から)

## I はじめに

### 1. 調査の経過

新西部埋立場と搬入道路建設に伴い福岡市環境局施設課より建設地における遺跡の有無について教育委員会埋蔵文化財課へ照会が行なわれた。これを受け当課では試掘調査を行い、遺跡の範囲を確認するとともに発掘調査へ向けての協議を重ねた。

この事業に伴う調査は埋立場内の大原D遺跡群を平成4年度から行い、搬入道路部分の大原A遺跡群を平成6年度に実施している。さらに平成7年度には搬入道路部分の大原E群の調査が予定され、全調査が終了することになる。

本報告は福岡市西区今津3750-1外に位置する搬入道路部分の調査分である。既刊の文化財分布地図では大原A遺跡群に含まれるものの中丘陵部は範囲外であった。しかし、試掘調査により丘陵部（本報告ではI区とする）遺跡の範囲が広がる事が確認され、その後、踏査によって調査範囲外であるが、付近に占墳が3基以上存在する事も判明した。

調査は現地協議も済ませた平成5年10月28日から開始した。工事工程との絡みから丘陵斜面のI区から始め、北側へ下った沖積地のIII区、最後に中に位置する丘陵裾部のII区を順次、終了した。

I区の急斜面で重機による試掘が不可能な範囲については人力によるトレンチ設定し、遺跡の有無を確認しながら調査を行い、他は重機によって遺跡の範囲を表土剥ぎした。遺構の密度は全体的に薄いが、緩斜面のII区は畑地造成時に大半を削平されたものと考えられた。調査終了は平成6年1月24日で調査面積は約1,700m<sup>2</sup>に及ぶ。

### 2. 調査体制

調査は以下の体制で臨んだ。

調査主体：福岡市教育委員会

調査主体：埋蔵文化財課長 折尾 學 埋蔵文化財第1係長 横山 邦雄

事前審査：文化財主事 浜石 哲也 係員 長屋 伸

庶務：埋蔵文化財課第1係 吉田 麻由美

調査担当：埋蔵文化財課第1係 荒牧 宏行

調査作業員：百武 義隆 峯不二夫 高岡 喜久雄 桐山 信保 根本 鉄矢 楠木 修一

越智 直 黒木 正治 麻生 寿昭 榎崎 耕助 友池 富美恵 堀田 昭

松原 順子 柴田 常人 柴田 タツ子 堀 ウメ子 松井 フユ子 宗 智子

松本 藤子 坂田 美佐子 海士野 悅代

整理作業：品川 伊津子 根本 鉄矢 海士野 悅代 坂井 美穂



- 1 小田A遺跡 2 小田B遺跡 3 小田C遺跡 4 柏木生産道路 5 武勢生産道路 6 大原古墳群A群 7 大原古墳群B群  
 8 大原A遺跡 9 人原古墳群C群 10 大原B遺跡 11 大原C遺跡 12 春山古墳群 13 春山遺跡 14 桑原飛揚貝塚  
 15 元岡瓜尾貝塚 16 元岡古墳群B群 17 元岡古墳群D群 18 元岡古墳群E群 19 元岡古墳群G群 20 元岡A遺跡  
 21 元岡B遺跡 22 元岡古墳群I群 23 柏木岳址

Fig.3. 周辺遺跡分布図(1/25,000)

## II 位置と環境

### 1. 地形

大原C遺跡は博多湾を臨む西岸に位置する。北側の丘陵は海岸まで迫り、海岸線は崖面ないし狭い砂浜で形成されている。対して、東側では三群変成岩からなる昆沙門山まで砂浜、長浜海岸がのび、古くは陸繫島で結ばれていた。南東部は現在までに干拓、埋め立てにより大きくその地形を変容させているが、もとは今津湾が挟り、端梅寺川の河口に三角州が広がっていた。

調査区は北東方向へ派生した丘陵部から更に砂礫台地からなる低位段丘面が谷に落ちていく範囲にわたる。低位段丘面は丘陵の延長方向にみられ、当初、この範囲が大原C遺跡群であった。周辺には谷底平野が広がる。(Fig. 4) なお、後述するが、遺跡の検出面である地山は丘陵から低位段丘面まで赤褐色粘質土、以北のII区北端からIII区にかけて砂礫となる。

### 2. 歴史的環境

遺跡の分布は海岸線に派生した丘陵先端部に多くみられるが、その時期、性格ともに多様である。縄文時代では後～晩期が知られ、福岡市内でも数少ない貝塚が集中する。長浜海岸の砂丘に縄文晩期～弥生時代前期の貝塚が発見された。最近、道路拡幅工事に伴って、桑原飛橋貝塚が調査された。本調査地点の南側で、大原川が貫流する谷開口部に位置する。ここでは阿高系や擦消し縄文土器とともに人骨8体、貝輪等などが出土した。また、北方の大原A遺跡の自然流路内から晩期黒川式土器が多量に出土した。周辺に集落が存在するものと考えられる。

弥生時代において玄式岩が露頭する著名な今山遺跡の石斧製作跡が南西3.5kmに位置する。近く呑山遺跡においても玄式岩の露頭とともに前期末に石斧製作が行なわれた証跡を示す遺物が出土している。また、前期末の貝塚として今津貝塚が知られている。集落に調査では大原A、B遺跡群（小篠遺跡として報告）の丘陵部において中期の住跡や土塙等が検出されている。本遺跡においても、遺構は検出されなかったが、中期の遺物が丘陵部から沖積地までのほぼ全域に出土したことは、この時期に丘陵尾根先端の、地形が適した所で集落が拡大していったものと思われる。

古墳時代では後期群集墳が目立つ。消滅、破壊されたものが多いが、既知の博多湾を臨む相子岳山麓や今津湾側へ派生する元岡付近の丘陵のみならず、北方の大原D遺跡や本遺跡でも新たに発見され、周辺においても未発見のものは多数あるものと思われる。

奈良時代以降の特筆されるべきものに製鉄遺跡がある。砂鉄と燃料資源に恵まれ丘陵裾地形を利用している。大原A遺跡では8～9世紀の製鉄炉が良好に保存し、大原D遺跡や桑原飛橋貝塚の北側（東桑原遺跡と呼称）でも鉄滓や炉壁等が多量に出土し、東桑原遺跡のものは12～13世紀という。

本遺跡でも主体を占める中世になると、今津周辺は文獻から盛況をきわめていた事が判る。平安時代まで「登志」と称されたのが仁平元年(1151)太宰府官人がおこした「箱崎・博多の大迫捕」を契機として「今津」と呼ばれるようになっていくと云う。すなわち、11世紀末までが鴻臚館貿易、以後、博多綱首と呼ばれる商人によって博多津が栄えた。しかし、先の事件により、博多の治安があれ、その中心が移ることになり、古津としての博多津に対し今津という。もとは仁和寺が実務する怡土庄の港津で、仁和寺と縁の深い榮西が同地の誓願寺に召聘されている。これらの史実を裏付ける発掘調査は皆無に近い。わずかに昭和33年の土取り中に今津の砂丘上から陶磁器を副葬した人骨が200体出土した事や、誓願寺近くの小調査による鬼瓦片を含む多量の瓦片の出土にその片鱗をみることができる。



（網かけは調査区、ドットは新たに発見された古墳、B-3 大原古墳群C群、A-2 大原B遺跡）

Fig.4. 調査地点位置図(1/4,000)

その後、蒙古襲来に備えて築かれた元寇防塁が本調査地点から見下ろす長浜海岸に良好に残る。文永の役後、日向、大隅国の御家人に命じ石築地（元寇防塁）が築かれた。昭和43年の発掘調査では、その構造が細部にわたり判明している。

戦国時代になると、怡土庄に権益をもつ大友氏が大内方の高祖城に対立し桔子岳山頂に城を構え、城督に白杵氏をおく。大内氏滅亡後は毛利氏と組する原田氏と度々合戦を交え、天正7年（1579）の合戦には立花道雪の名もみられる。今津の南西の独立丘陵に白杵氏端城がある。ここには宝鏡印塔が祀られている。

江戸時代の「元禄十四年筑前図」には本調査地点付近に「今津村之内大原村」が記されている。この頃には砂礫台地を中心とした微高地にも村落が拡大したものと思われる。

\*中世以降の文献に関する記述は「今津」 今津小学校創立百周年記念 「日本地名辞典」 角川書店  
「よみがえる中世1」 平凡社による。

### III 調査の記録

#### 1. 調査の概要

調査は丘陵部標高31.00mから沖積地の標高5.50m地点までに及ぶ。以北の沖積地は試掘で遺跡は確認されず、谷の開口部に当たると思われる。調査区は便宜上、南側から丘陵斜面のI区、丘陵裾部の緩斜面であるII区、沖積地のIII区に地区を大別した。I区では尾根線近くの緩斜面部分から中世の溝3条、掘立柱建物跡2棟を復元した柱穴群が検出された。II区の現況は畠地に段築造成され、かなり削平を受けている。この為、溝と柱穴群が散在的に検出される。しかし、沖積地との境近くから古墳後期の竪穴住居跡が1棟検出された。III区では古墳時代後期の溝1条、中世の溝1条と井戸1基の他柱穴が比較的多く検出された。全体を通して中世の遺構が主体を占め、遺構は検出されなかったが弥生時代中期の土器片や縄文時代を含む黒曜石製の石器がほぼ全城に出土した。

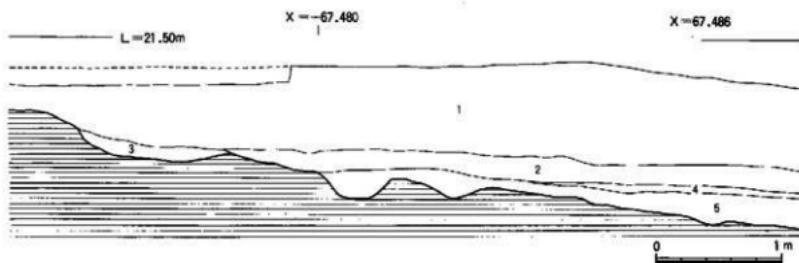
#### 2. 調査の方法

測量および図面作成に当たっては国土座標を使用しグリッドを組んだ。遺構が散在的であったために2mグリッドを組んで作成した1/20図面の他、1/50、1/100平板図を併用した。掲載遺構名、図面についての凡例を参照されたい。

#### 3. I区の調査

丘陵の急斜面をかすめ北東に派生する尾根線上へカーブしながら調査区は延長していく。現況は山林で、最高所は新しく発見された仮称2号墳(Fig. 44、調査区外に立地)の墳裾付近で標高31mである。丘陵斜面は2号墳裾部と比較的緩やかな斜面にトレーニングを設定したが、SK064(x=67484)以南には遺構は検出できない。

SK063付近の現況は平坦に近く、土層断面(Fig. 6)から上層に層厚80cmの客土のような明黄褐色土が堆積し、最下層の炭化物を含む黒褐色土が地形の下降とともに、層厚を増すことが判る。この周辺で柱穴群が検出されたが、以北のSB061周辺まで急斜面となり堆積土が薄く、遺構を見ない。



##### 土層説明

- 明黄褐色粘質土(客土か)
- 明黄褐色粘質土(下降した北側ではやや暗色を呈し、南側では1との層界が不明瞭となる)
- 淡赤褐色粘土混じり淡褐色土
- 黄褐色粘質土(2との層界は不明瞭であるが、やや暗色を呈す)
- 黒褐色粘質土(炭、地山の赤褐色土を若干含む。層界は明瞭)

Fig. 5. I区緩斜面土層断面図(調査区西壁、1/40)

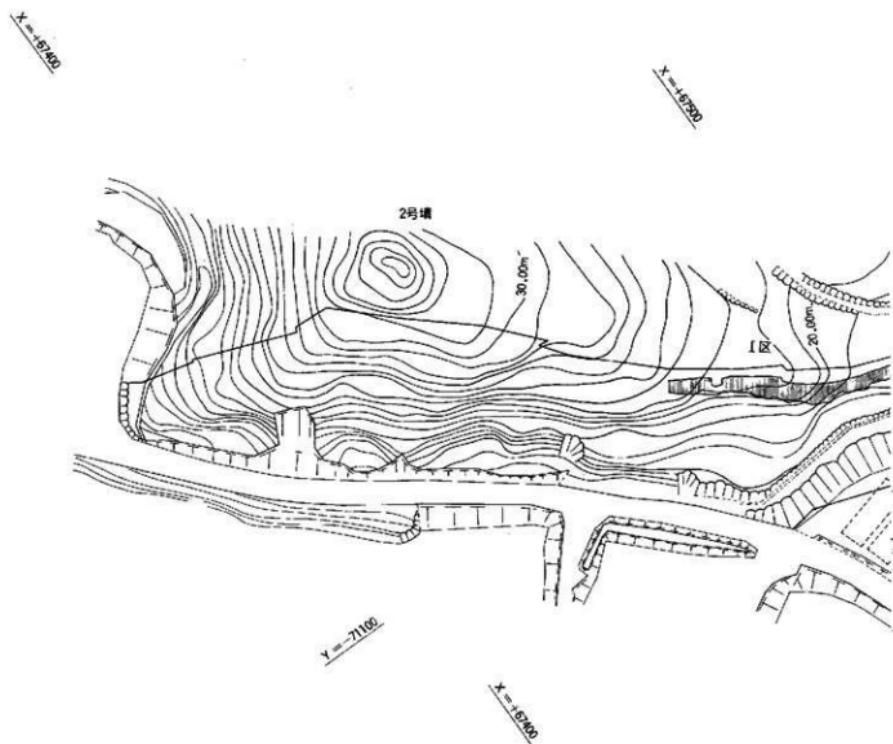
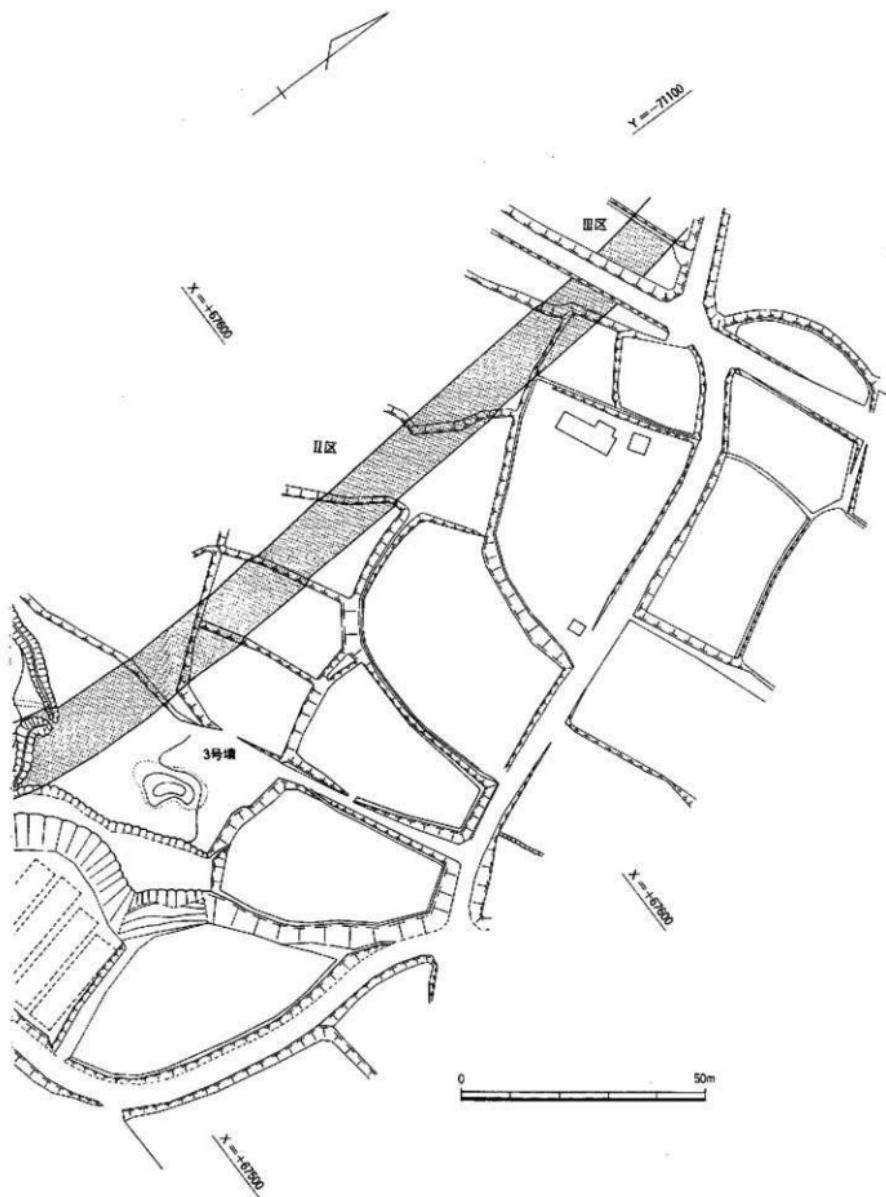


Fig. 6. 調査区周辺測量図(1/1,000)



尾根線上に近接していくSB061付近(x=67506)から表土下約20cmに黒褐色包含層の堆積がはじまり、現況水路まで層厚10~20cmみられる。遺構も集中的に検出された。調査区は現況水路、SD02を境に大きく迂回し、北側緩斜面の畠地(II区)へ延長していく。

#### 溝(SD)

I区中程の丘陵斜面に規模の小さいSD205、04が、南端の地形が緩斜面に変換する位置に現況水路とともにSD01、02が丘陵を切断するように検出された。

#### SD01

遺構が集中するI区南端の地形変換点で検出された。幅3.9m、深さ90cmを測る。北東方向へ走行するが、基底面が立ち上がり、細まったプランで途切れる。埋土には黒褐色土が堆積する。

#### 出土遺物

5、6は土師皿である。5は復元口径8.8cm、底部は回転ヘラ切りである。灰白色を呈し、瓦質に近い。6は口径9.0cm、底部は糸切りで板上圧痕が残る。7は土師質環身で、底部はヘラ切りか。8は瓦器碗で外底部にヘラ記号がみられる。9~11は瓦器碗である。11は焼成不良で外面は淡黄灰色を呈す。高台は丸く面取りされる。12は玉縁口縁の白磁、13は須恵質の捏鉢である。口縁端部は幅1cm程度で小さい。東播系と思われる。

#### SD02

I区南端の現況水路に沿って検出された。幅2.5cm、深さ75cmを測り、断面台形状を呈す。周辺一帯に掘削による地山の赤褐色土が汚れた土が被り、埋土も明淡褐色土の地山と類似したものであった為に、発掘作業が困難をきわめた。基底部には10~30cm大の塊

石が散在していたが、意味は不明。

#### 出土遺物

14は青白磁の合子である。外面天井部には花弁文がレリーフされる。15、16は同安窯系の青磁皿である。17の蓮弁は幅広く彫られ、鍋は低く不明瞭である。緑味が強く発色する。18の青磁碗は外面に梅目を施し、内底部は螺旋状に強い起伏がみられる。釉は淡いオリーブ色を発する。19の蓮弁は鍋が鋭い。20は草花文が施された龍泉窯系の青磁碗で

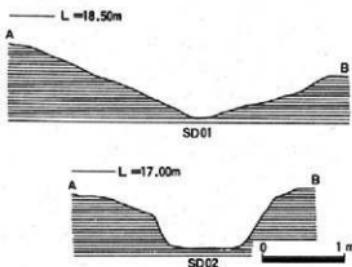


Fig. 7. SD01, 02断面図(1/60)



Fig. 8. I区完堀状況(北東から)

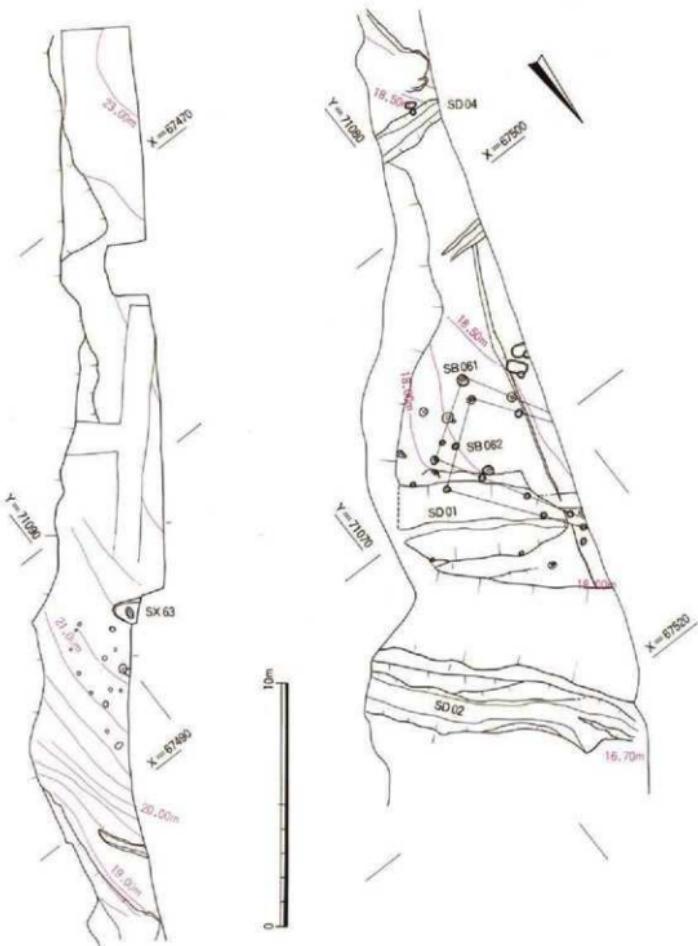


Fig.9. I 区造構配置図

ある。内面見込み内は無文である。21は内面見込み内に「金玉満堂」のスタンプをしている。満が草冠で下位が不明瞭となっている。また、堂の丨線を逸している。22の瓦器碗は外面体部上位が凹み下位に圧痕がみられる。内外面のミガキは器面があれて不明。23は陶器で、外面肩部上に2条の沈線が巡る。外面は風化してアバタ状となり、褐色を呈す。24、25は瓦質の鉢である。外面に指頭痕が強く残る。24は灰白色、25は黒灰色を呈す。26、27は須恵質の底部である。26の内面ヨコナデによる起伏が明瞭に残る。27は東播系捏鉢であろう。28も須恵質の東播系捏鉢である。内面に不定方向のナデが加わる。29は灰白色を呈し、瓦質に近い。内外面にヨコナデによる起伏が明瞭に残る。30、31は滑石製石鍋である。30は外面にケズリ痕を明瞭に残し、内湾する体部から口縁にかけて肥厚する。方形の耳が一部遺存する。31は断面三角形の鉢以下に煤が付着する。遺存する部分は研磨され、ケズリ痕を残さない。

#### SD004

I区中央のX=67498付近で検出された。幅1.2m、深さ34cmを測る。調査区内では南北方向に走行する。近くから青磁、白磁片のほか石器が出土した。

#### 出土遺物

1は白磁皿、2は白磁碗で破面を打ち欠いている。3は褐釉陶器の耳部、4は瓦器碗である。

#### SD205

I区中央部で検出された。地形変換線に沿って走行する。幅40cm、深さ18cmを測る。埋土は淡赤褐色～灰色を呈し、地山と幾分異なる。出土遺物は無い。



Fig. 10. SDO2発掘状況(北から)

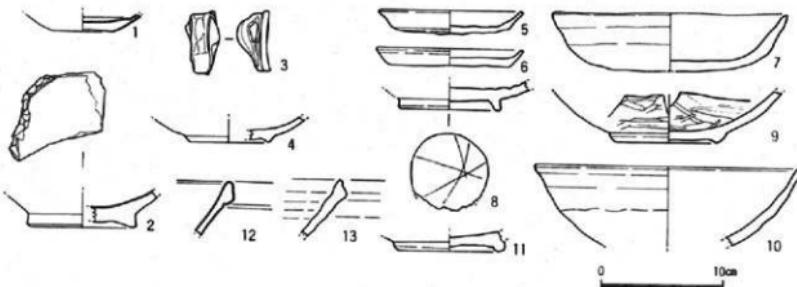


Fig. 11. SD01、04出土遺物実測図(1/3)

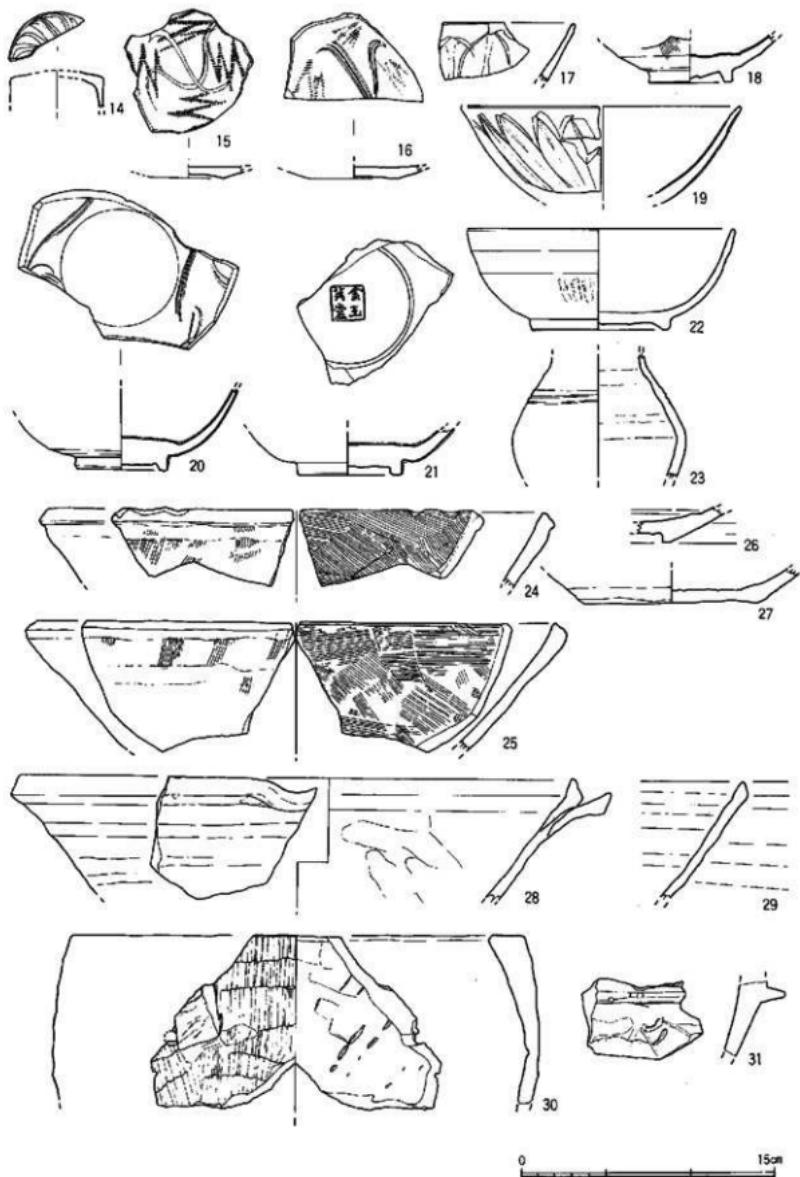


Fig. 12. SD02出土遺物実測図 (1/3)

掘立柱建物 (S B)

I区では2箇所に柱穴群をみるが、調査区が限られる為、復元できた掘立柱建物跡は2棟である。

SB061

SD01と切り合い、さらにSB062と主軸をやや異にして重複している。梁行3.60m、桁行の柱間は200~210cmの距離をとる。梁行の間柱の外側に深さ34cmの柱穴が検出された。

SB062

梁行3.80m、桁行の柱間は200cmを測る。SB061同様、梁行の間柱の外側にやや小さい、深さ33cmの柱穴が検出された。

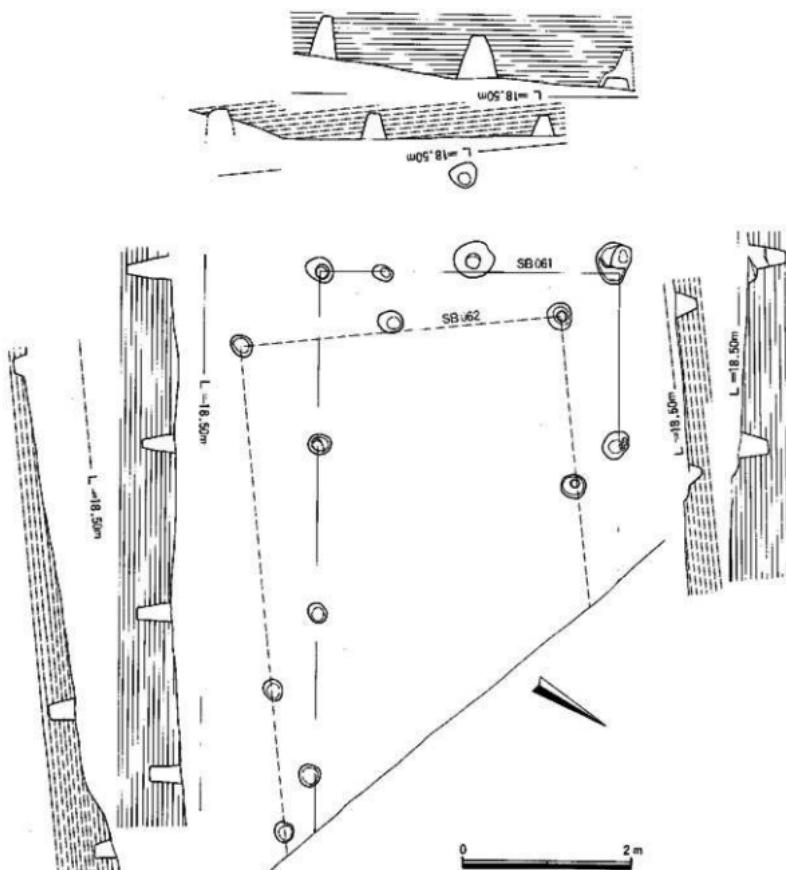


Fig.13. SB061、062実測図(1/60)

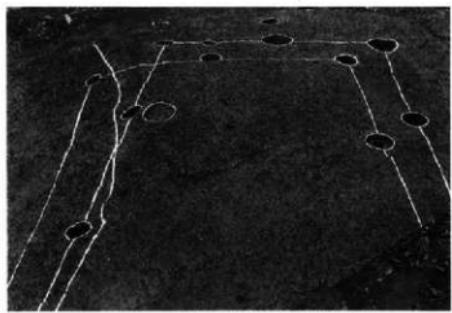


Fig. 14. SB061、062発掘状況(北から)

#### 4. II区の調査

丘陵裾部に位置し、緩斜面に変わる。現況は畠地が多く、段状に造成されている。造構は削平を免れた中世の溝を主体に検出された。北端では古墳時代後期の竪穴住居跡が検出された。

##### 溝

比較的新しく、現代までも含むと考えられる水路用の溝と混在している。方向も類似するが、埋土が明らかに異なり判別が可能である。

##### SD040

II区南側で検出された。SD041と平行して北東方向へ走行する。幅1.8m、深さ22cmを測る。基底面は地形に沿って北東へ低くなる。出土遺物は少なく図示できるのは40のみである。40は捏鉢口縁と考えられる。内面に2条の隆帯がみられる。内外面は淡灰褐色を呈し、露胎は赤褐色で白色砂粒を多く含む。

##### SD041

幅50cm、深さ10cmで043と平行する。出土遺物は少なく図示できるものはない。

##### SD042

II区北側で北西方向へ走行している。現況の畠地造成による段落ち際に平行している。北側の上端は削平のため不明瞭となっている。検出された最大幅4.5m、深さ33cmを測る。埋土は黒褐色で、出土遺物は比較的多い。

図示した出土遺物36は青磁の小碗である。内底部に螺旋状のヨコナテによる沈線がみられ、中心に砂目跡が残る。釉は灰色がかるオリーブ色を発し、厚く氷裂はない。37は瓦器碗で、体部下位に凹線状の起伏がみられ、内底

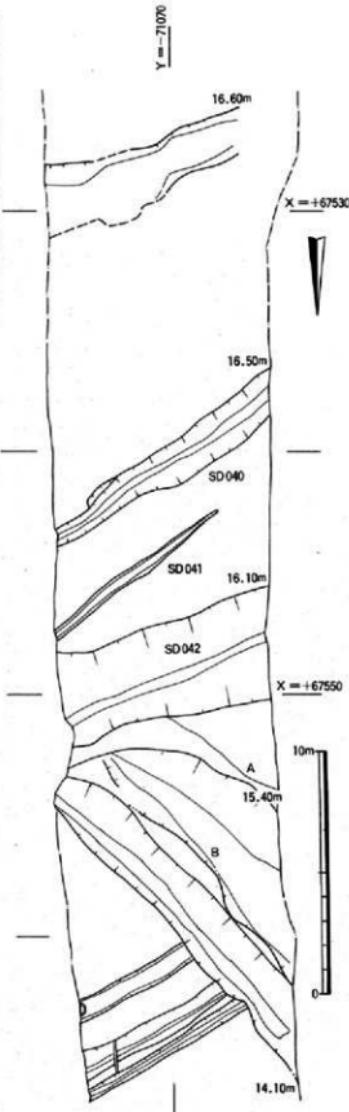


Fig. 15. II区造構配置図(南部、1/200)

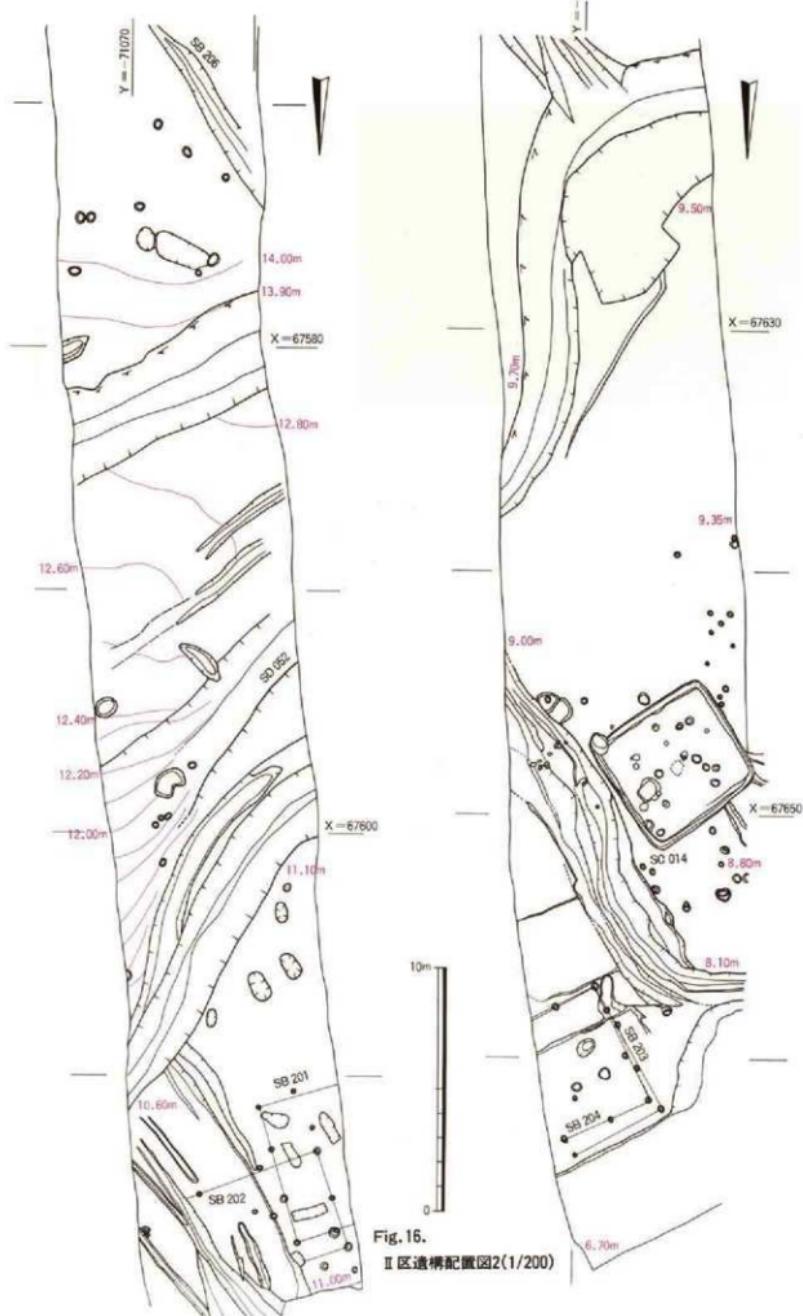


Fig.16.  
II区造構配図2(1/200)

に重ね焼きによる剥離した粘土の融着が輪状にみられる。38の白磁碗は褐色がかる発色で、外面口縁部下が凹む。39の白磁口縁は端部が水平に外へ延びる。40は白磁の玉縁口縁である。41の土師皿は口径7.9cmを測り、外底に板目を残す。42の瓦器椀は外面の体部上位に回転を用いたヘラミガキが沈線状に残り、下位に指頭痕がみられる。内底にコテアテを施す。43の瓦器椀は内外面の器面が荒れ、調整不明。44の瓦器椀高台は球形をなし、外底に板目を残す。外面黒色を呈す。45、48は前代の混入で、48は須恵器坏身、48の土師器鉢は内外面ミガキと思われる。

#### SD206

北西方向に走行し、調査区内で削平のため途切れる。幅1.0m、最深部で16cmを測る。埋土は黒褐色土で、出土遺物は無い。

#### SD052

II区中央部で段落ちに沿って、南西方向へ走行する。調査区東側に包含層の堆積を見る。深さ40cm程で、幅は段落ちで上端が削平され不明。出土遺物の47は龍泉窯系の青磁である。



Fig. 17. II区完掘状況(北から)

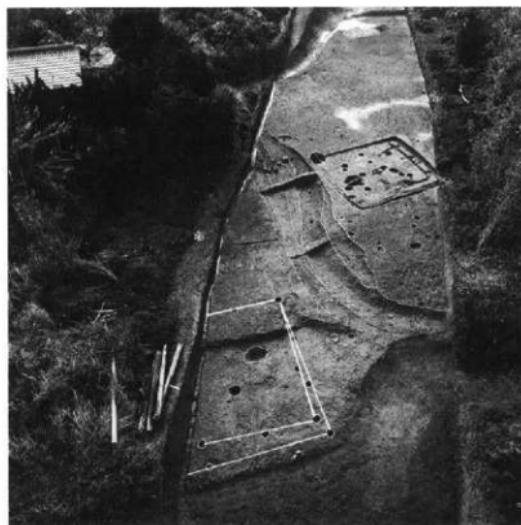


Fig. 18. II区北半部完掘状況(北から)

SD024、025

II区北端で検出された。湾曲しながら台地際を限るように走行する。切り合っているが、下底の形状から更に1条あった可能性があり、南側の地形が高くなるSD024の方へ付け替えて行ったものと考えられる。埋土はともにマンガンを含む灰色土混じり褐色土で時期は比較的新しいものと思われた。

なお、SD025を境に北側では包含層が堆積し、地山が砂礫層になる。

出土遺物

32~35はSD024出土である。32の白磁は器形が不明確で皿の可能性もある。釉は灰色味をおび、厚い。33は松梅を染め付けた「くらわんか」茶碗である。34の土師質の摺鉢は内面にヨコハケが残り、摺目は5本単位である。外面にタタキ状の痕跡がみられる。35の瓦賀捏鉢の外表面部はタテハケがナデ消されずに残り、文様に見える。外面は灰白色、内面は黒色に焼される。

掘立柱建物跡

造成による段落ち付近の削平を比較的免れた地点で柱穴が検出された。従って本來は全面的に分布していた可能性がある。 $x = 67596 - 67608$ の調査区東際には包含層が堆積し、建物の復元はできなかったが柱穴が検出された。

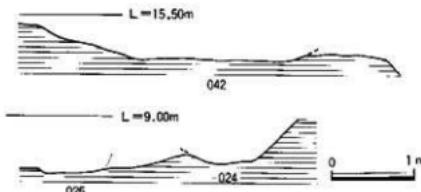


Fig. 19. SD042, 024, 025断面図(1/60)

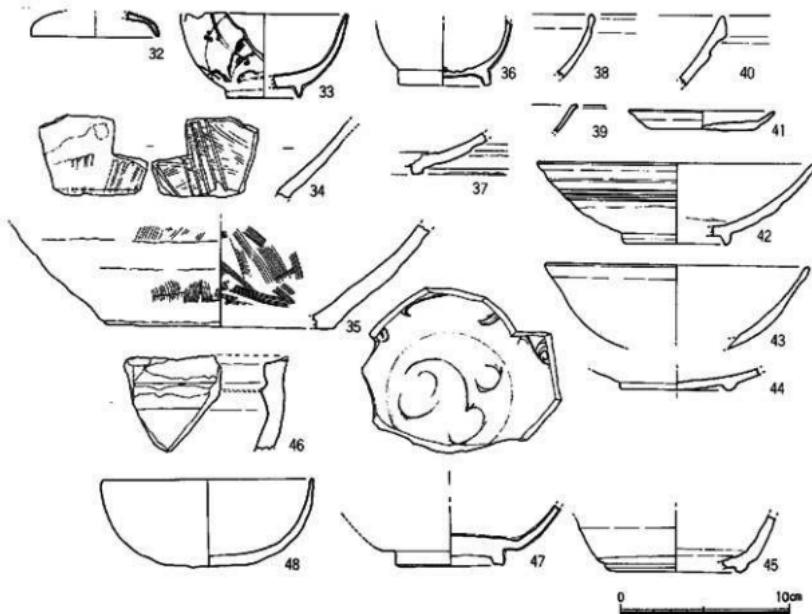


Fig. 20. II区SD出土遺物実測図(1/3)

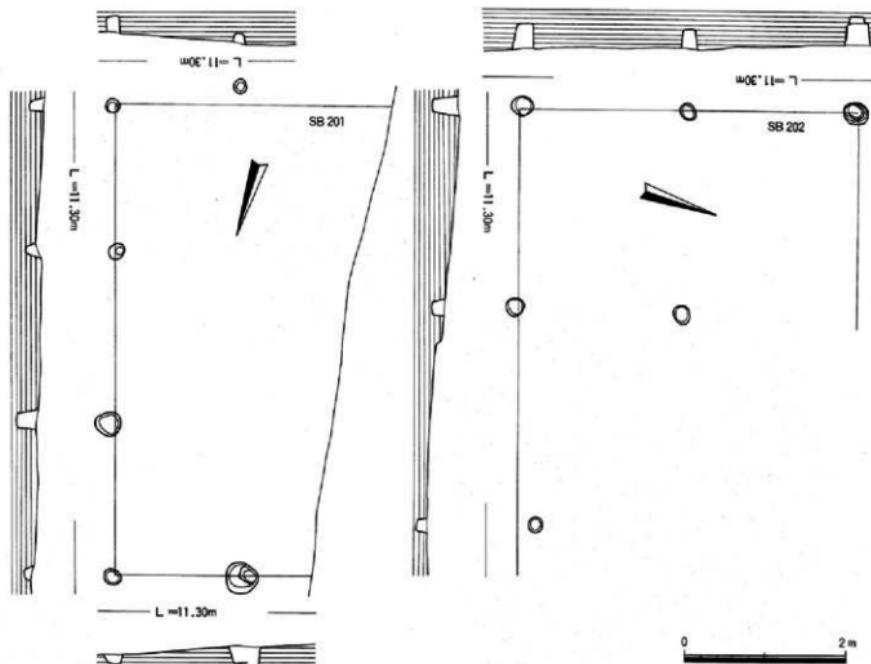


Fig. 21. SB201, 202実測図(1/60)

#### SB201

II区中央で検出された南北棟で、SB202の東西棟と切り合う。桁行5.8mを測り、中間の柱間が2.1mでやや長い。梁行片方の間柱が外側へ外れる。

#### SB202

復元した桁行の柱筋に疑問が残るが、規模が大きい建物である。梁行は柱間2.1mで均等に割り付ける。図示した南側桁行の柱筋よりさらに湾曲するが、他とはほぼ同じ柱間2.6mの柱穴が調査区間に検出されている。



Fig. 22. SB201, 202実測状況(北から)

### SB203

II区北端で検出された周辺に古墳前期の包含層が堆積するが(P-22参照)、除去後、柱穴を検出したSB204と重複し立て替えと考えられる。2×3間の場合、桁行5.8mを測り、SB201と規模を同じくする。

### SB204

SB203と柱筋が近接する。復元したものは南西隅の柱間の距離に疑問が残り、南辺の柱筋は異なる可能性がある。西辺側の柱穴基底面のレベルは地形に沿って北側へ低くなる。

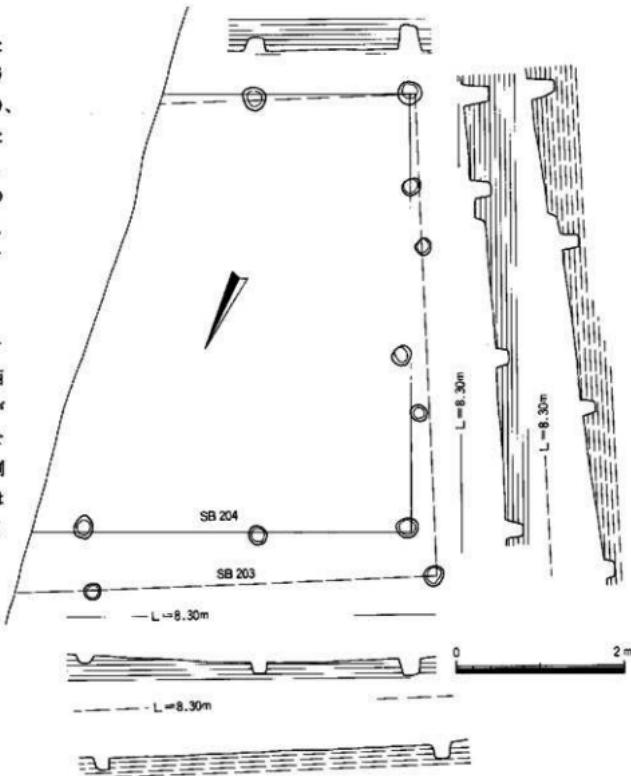


Fig.23. SB203, 204実測図(1/60)

### 豎穴住居跡

削平を比較的受けていない北端にSC014が検出されたのみである。

### SC014

南辺5.3m、東辺5.0mを測る正方形に近いプランである。壁高はほとんど無く、検出面で壁溝がみえていた。西辺から北辺側にかけて2条平行した壁溝が検出されたが、内側のものは薄い貼床上が上に被り、立て替えにより拡張された住居跡と判断できた。

外側の壁溝は幅30cm、深さ8cmで全周する。北辺のみに壁溝が重複している。補修されたものか。南西隅の壁溝内に炭化物を多く含む。西辺に接しP<sub>1</sub>まで炭化物を多く含む、深さ7cmの溝が検出された。豎穴住居外には延長せず、切り合っていたものとは考えがたい。内側の壁溝は幅12cm、深さ10cmを測る。南辺で外側の壁溝に接して、北辺中央の焼土まで確認できたが、削平のためか、その延長は検出できなかった。

主柱穴は拡幅した豎穴住居跡(以下、新住居跡とよぶ)に伴いP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が、深さ40cm削削されてい

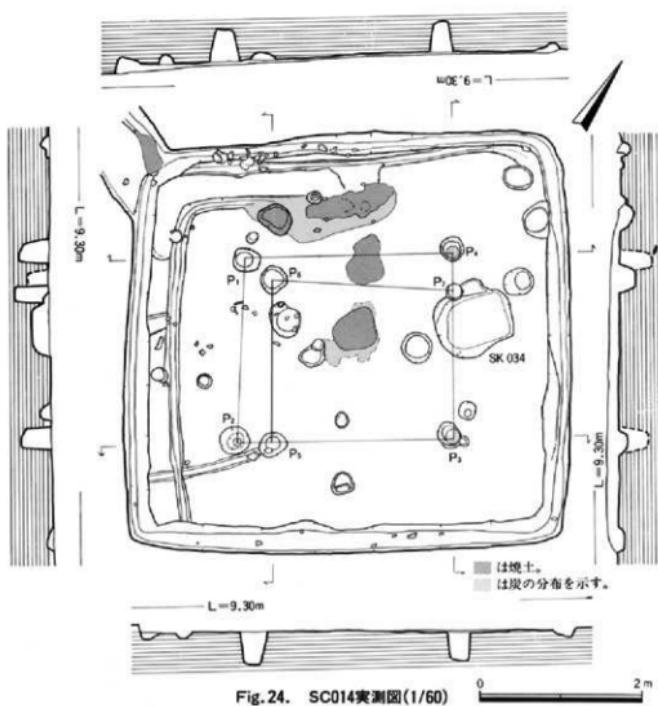


Fig. 25. SC014実掘状況(南東から)

る。内側の住居跡（古住居跡とよぶ）ではP<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>が考えられるが、P<sub>5</sub>は同じ位置に据え変えられた可能性がある。P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>の深さは20cm内と深い。

焼土は中央部、古住居跡の北辺中央付近および北西隅の新住居跡外で検出された。

古住居跡の北辺中央は竈と考えられる。すでに床面まで削平を受け構造は不明であるが、袖部等の粘土はみられない。この焼土と中央炉跡の間にさらに1箇所、焼土が検出された。従って、北側の焼土が新住居跡に、南側のものが古住居跡に伴った竈の燃焼部と考える。北西隅のものは調査区が限られ、判断が難しい。煙道の可能性があるが、別の住居跡に付設されていたものであろう。

中央炉は新住居跡のほぼ中央に位置し、径50cm、深さ15cmの浅皿状を呈す下層は焼土が詰まる。時期は不明確であるが、位置や検出したレベルから新住居跡まで伴うものと判断した。従って竈と併用されていたものであろう。

SK034は東辺寄りの中央に設置している。基底面は平坦であるが、竪穴住居の中央に向かって若干レベルが低い。

遺物は北西隅の壁溝内に高环、鉢、甕等が重なり合って出土した。



Fig. 26. (1) SC014壁溝内遺物出土状況



Fig. 26. (2) SC014内中央炉跡発掘状況



Fig. 26. (3) SC014内土壌(034)発掘状況

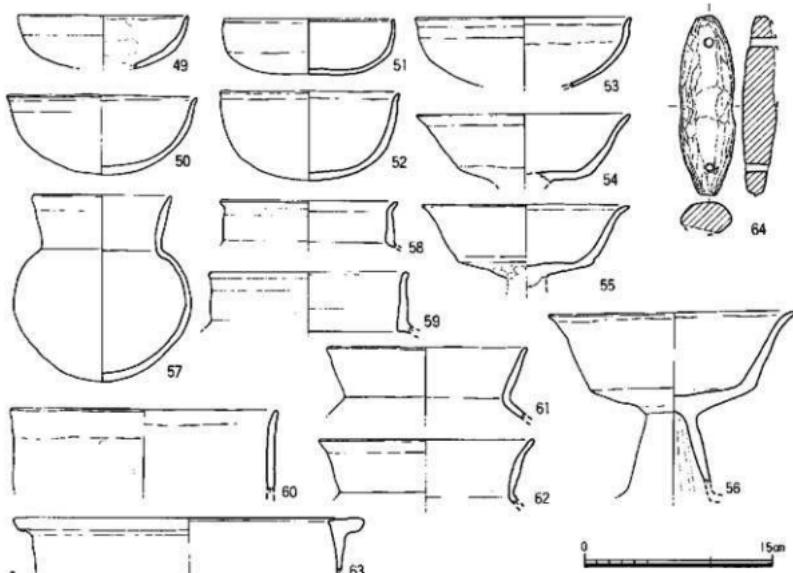


Fig. 27. SC014出土遺物実測図(64は1/2、他は1/4)

#### 出土遺物

49~53の鉢は北西隅の壁溝内から出土した。いずれも器面の摩滅が著しく調整は不明である。49は細片で、口縁部にかけては内湾しながら細まる。50は完形にちかい。底部から体部にかけて湾曲し、口縁端部は外反する。赤褐色を呈し、胎土は砂粒が少なく精良である。51は平坦に近い底部から内湾して短い体部がのびていく。口縁端部は若干外反する。胎土には砂粒を多く含む。52は全体的に丸く、口縁端部を外反させる。赤褐色を呈し、胎土は精良。53は口縁端部の外反が比較的大きい。赤褐色を呈し、細砂粒を多く含む。54~56の高环も北東隅の壁溝内から出土した。環部の口縁部は外反し、54、55の体部はやや内湾する。56の柱状部は膨らみをもつ。55の環部は接合部から剥離し、半球形の差し込みが残る。ともに赤褐色を呈し、胎土には細砂粒を多く含むがきめは細かい。57も北西隅の壁溝内から出土した。胴部は球形を呈し、口縁部中位は肉厚で端部をわずかに外反させる。胴部は火熱を受け赤褐色を呈し、煤が付着する。胎土は砂粒が少なくきめ細かい。58、59の短頸直口壺の口縁部はやや内湾し、端部を外反させる。60は北東隅の壁溝内から出土した壺である。61、62の口縁部は直立ぎみに立ち上がり、中位を肉厚にする。端部は外反させ丸く收める。63は北東隅の竪穴住居内で検出された焼土近くから出土した。弥生中期の壺で混入したものである。64は竪穴住居内の柱穴から出土した。滑石製石垂である。紡錘形を呈し、2箇所に穿孔がみられ、中央に繩掛のくびれを削りだす。器面に煤状の付着物がある。器長7.2cm、幅2.1cmを測る。

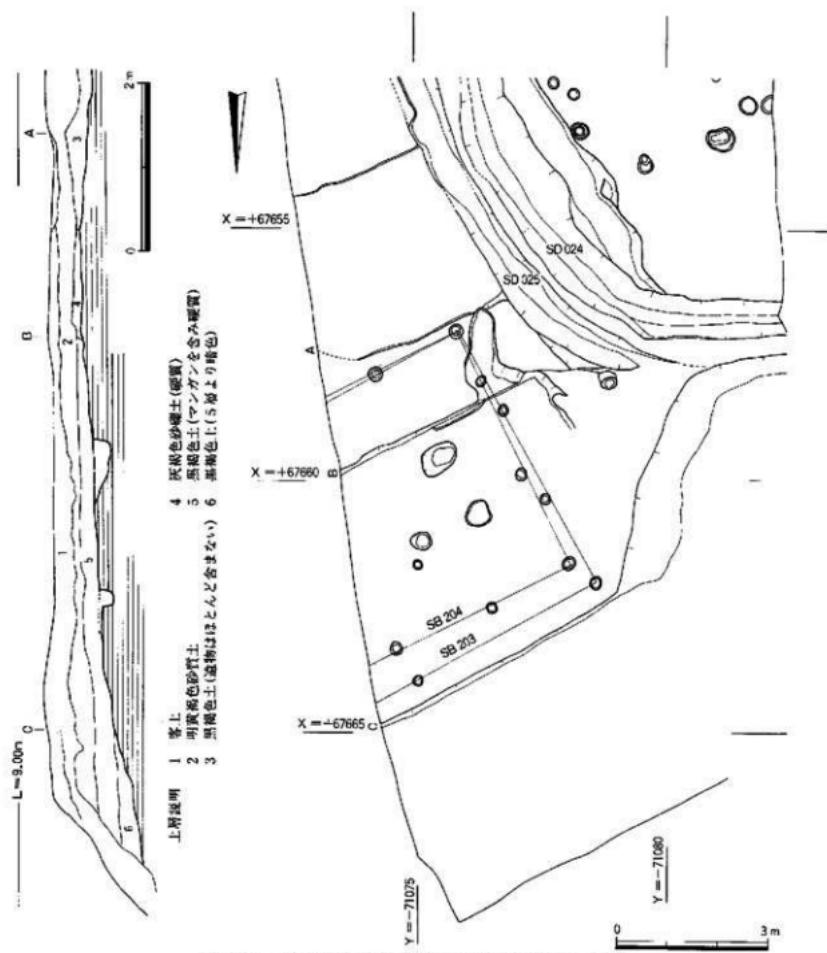


Fig. 28. II区北端造構配置図と土層断面図(1/100, 1/60)

#### II区北端包含層

II区北端のSD24、25北西側に黒褐色の包含層が認められた。層厚10~25cmで、北側へ緩く下降していく。図上のB地点の段落から以北には上器片が集中し、竪穴住居跡の可能性も考えられたが、プランは検出されず、土層断面からも確認できない。包含層除去後、下層地山の砂礫土から柱穴を検出し、SB203、204を復元した。さらに、C点以北では水田の造成が行なわれ、包含層も削平を受け、沖積地へ埋没していく。



Fig. 29. II区最北端包含層遺物出土状況(西から)

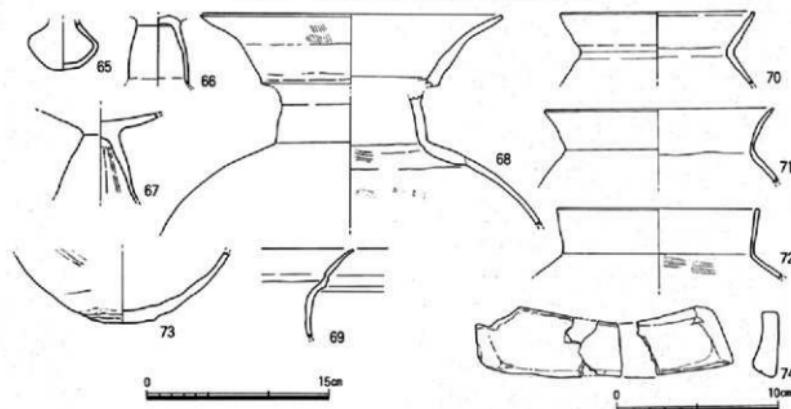


Fig. 30. II区最北端包含層出土遺物実測図(1/3, 1/4)

#### 出土遺物

65は壺のミニチュアである。器形から弥生時代の所産であろう。器面はなめらかで指ナデ痕はみられない。66は影らみをもつ高環柱状部である。67は脚据にかけて膨らみを持ちながら聞く。環部は接合部からの剥離か、円盤状を呈し、端部が丸く摩滅する。68の二重口縁壺は摩滅し調整が不明瞭であるが、口縁部外面と胴部内面にハケメがみられる。69も口縁部外面にわずかにタテハケがある。70の口縁端部は若干つまみ上げられる。71の口縁部は器肉が薄い。72の直口壺は器肉が薄く、灰色を呈す。口縁端部は水平にちかい。胴部内面に平行タタキの痕跡がのこる。73はわずかに突出した底部をつく。外面にタタキの痕跡がのこる。74は細粒の砂岩製砥石である。3面に砥面がみられる。

### 5. III区の調査

II区と道路を隔てた北側の水田部に位置する。III区以北では試掘により微高地の落ち際に厚い砂層の堆積があり、さらに北側では青灰色粘土と砂礫層がみられる。遺構は検出されない。従って、Fig. 4で示すように台地は北西の水田や畠地部へのびていくが、その周辺の沖積地においても安定した砂礫層が地山の範囲ではII区北端～III区のように遺跡が形成されている。

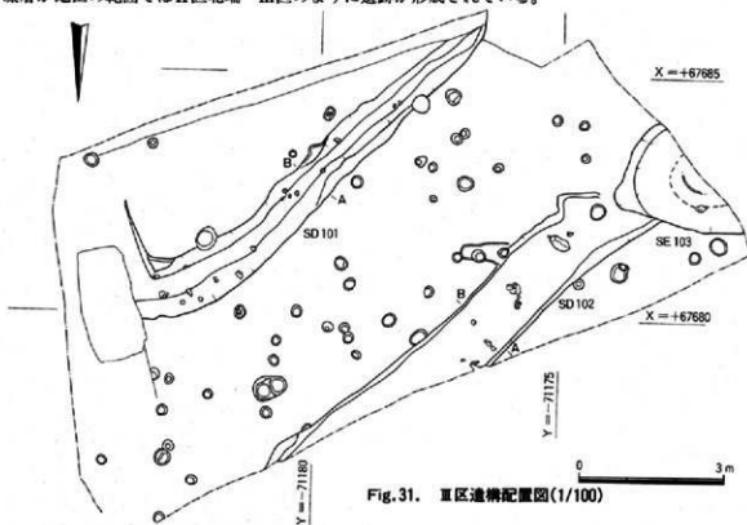
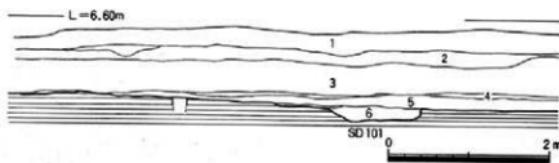


Fig. 31. III区遺構配置図(1/100)



Fig. 32. III区実測状況(北東から)



土層説明

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 耕作土                   | 4 暗色土(3に比べやや暗色)         |
| 2 酸化鉄(床土)と灰色土との互層(2~4枚) | 5 暗灰色砂質土(包含層。穂を若干含む)    |
| 3 褐色土                   | 6 暗灰色砂質土(SD101の埋土。穂を含む) |

Fig. 33. III区調査区東壁土層断面図(1/60)



Fig. 34. III区調査区東壁土層

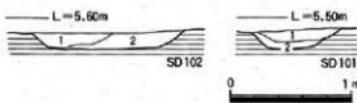
#### 層序

現況は標高6.45mの水田である。図示した調査区西壁土層では耕作土と床土下に層厚約40cmの3層褐色土が堆積する。この土層は北側では黄褐色粘質土に変移していく。さらに下層に包含層である5層暗灰色シルトが北側へ層厚をまして堆積する。

北壁付近ではこの包含層下に淡黃灰色粘質土が層厚7cm程度堆積する。地山の明黄褐色砂礫は緩やかに北側へ下降し、調査区内においては標高5.65~5.40mまでみられる。

#### SD101

III区北側を北東方向へ走行する。幅90cm、深さ15cmを測る。下層に灰色砂層が堆積し、水流があつたことを示す。



土層説明

- |               |             |
|---------------|-------------|
| (101)         | (101)       |
| 1 黄褐色砂混じり粘土   | 1 暗灰色粘土混じり砂 |
| 2 黄褐色砂混じり灰色粘土 | 2 灰色砂       |

Fig. 35. SD101, 102土層断面図

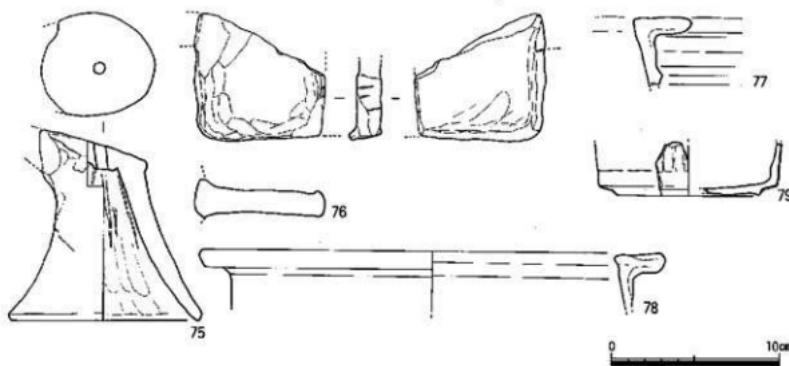


Fig. 36. SD101, 102出土遺物実測図(1/3)

#### 出土遺物

75~78が出土した。ほかに須恵器片を若干含む。75は靴形器台で、上面突端の支えを欠損する。外面に板状工具の圧痕を残し、内面は縦方向の強いナデによる起伏が大きい。76の器形、用途不明品である。平坦な方形を呈し遺存するが、指ナデにより肥厚した端面は接合面から剝離している。器形を残す1辺に刻みが施されている。器面は黄灰色を呈し、露胎した部分および接合面は黒灰色を呈す。77、78は弥生中期の甕片である。

#### SD102

III区南側をSD101同様、北東に走行する。幅1.3m、深さ20cmの断面台形を呈す。下端は削平を受け、浅い部分は不明瞭となる。埋土は灰色砂まじり粘土が主体で、上色から新しい時期のものと判断された。

#### 出土遺物

出土量は少ないが、土師器、須恵器が大半を占める。79は青磁で、外面体部には菊文を浮き彫りする。内面は露胎で、外底部の低く幅広い高台は蛇目状に露胎し、褐色を発した鉄足である。

#### 柱穴

密度は薄く、SD101以北では希薄となる。

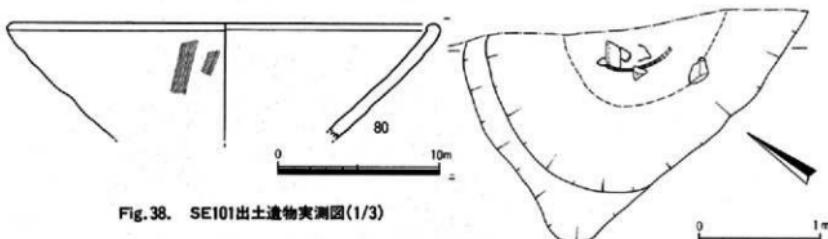


Fig. 38. SE101出土遺物実測図(1/3)

### SE103

III区東壁際で検出された。東半分が調査区外のため、半割した掘削となり、安全上、発掘を途中で中止した。井筒は桶が使用され、土層断面から、その立ち上がりが明瞭に判る。桶周辺に20cm程の石が散乱する。

### 出土遺物

図示できたのは80のみである。土師質の捏体である。口縁端部が内側に折り返されたようく丸く突出する。調整は器面の摩減が著しく、不明瞭であるが、外面にタテハケがみられる。明黄褐色を呈す。

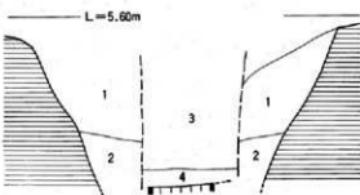


Fig. 37. SE101実測図(1/40)

### 土層説明

- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1 貫褐色土混じり暗灰褐色土 | 2 青灰砂        |
| 3 灰褐色土         | 4 青灰砂混じり黄褐色土 |



Fig. 39. SE103井筒(桶枠)検出状況(南から)

## 6. 大原C 1次出土石器

大原C遺跡1次調査において出土した石製遺物のうち、多少なりとも加工の施された資料を石器とし、43点を図示報告する。資料には明確な名称をもつて分類できる資料と、特定の形状をとらず分類の不明確な資料とが含まれている。

81～85は石鎌である。81・82、素材である剝片の周縁のみに加工を加えている。81は石器上の上位に素材の打点を置き、82は下位置に打点を置く石器である。83～85は両面加工の石鎌である。86は槍先形尖頭器とする資料である。縦長剝片を素材とし、素材上面の一側辺と、主剥離面側の両側辺に加工を加えている。両端部を欠失し、尖端部の存否については判別できない。安山岩製で、素材の剝片は、刃器石核から剥離されたものとも考えられる。

87はつまみ状石器とする資料であろうか、石錐の可能性を残す。

90は素材である縦長剝片を横断するような剝離面を打点として、一側辺に極状剝離を加える石器である。彫器とするべき資料であろうか。両側辺には両面への加工が行われている。

88・89・91～108は一定の形状をとらない石器である。素材である剝片の縁辺部に連続する小剝離を加えている。ただ、この剝離底について人為的なものか、後世の営力によりはないか、といった疑問がこのる資料を含んでいる。88・89は、縦長剝片を素材とし、中程の両片からの深い抉り込みを残す資料である。91は素材である縦長剝片の両側辺に剝離痕が連続する。一方は凹刃状を呈する。92・93・95・97・98～100・133は素材表面からの剝離が一方の側辺に加えられた石器である。但し、98～100については、素材とするものがごく小形の剝片である点、疑問である。94は一方の側辺に、96は素材の末端部に急斜な角度の連続剝離が残されている。94は搔器のような形状を呈する。101・102・105・103は、不整な形状の剝片に比較的大きな剝離痕が単独、あるいは短く連続して残される資料である。104～108は、小さな剝離痕が断続して側辺に残される資料で素材とする剝片は、いわゆる刃器状剝片といえる例が多い。

109～116は石核とする資料である。剝片剝離作業面を持つか、複数の大剝離面で構成された面を持つ。109・110・112・113・116は113を除き、角柱状を呈し、剝片剝離作業面の全部か、あるいは大きな部分を最後の1枚の剝離面が占める資料である。原材に角礫の黒曜石を用い、礫面を利用している。113は、礫を半割したような剝離面のみが残される。111・114・115は石器表裏面の何れも、剝離作業が行われたような剝離面で構成される資料で、同一面でも対抗する位置から、また、反対面の剝離面を打面として利用しながら剝離作業が続けられているように復元できる石核である。

117・118は楔形石器であろう。石器長軸上の両端に対向するように剝離痕が残されている。剝離痕は、重複あるいは、極状剝離状を呈する点、特徴的である。119・120は円盤状を呈する両面加工の石器とみえる資料であるが、137はやはり、石器上の対向する位置にある剝離面から、楔形石器の可能性を考えることもできよう。142は本資料中極少数をしめる安山岩製である。

121は、長楕円形で断面楕円形の円礫を原材とする。一面と、側面の一部に敲打痕が密集して残されている。敲打痕は、幾つかの単位から成り立っているように観察される。122・123は叩き石とする。122は「Y」型の礫を、123は長楕円形状の礫を原材として用いている。122の両面の中央部と側縁部の一部に、123では、長軸上の両端に敲打痕が観察される。121～123は1/2に縮小して示す。

以上の資料について、黒曜石製の石器の風化の状態、原材に使用した礫の様態等から何れも縄文時代に属するものと考えられる。特定の形状をとる石器としては、石鎌を擧げることができるが、それからするならば、石器群に最低2つの時期を考えることができる。一つは石鎌85に示される縄文時代早期を中心とする時期であり、他方は資料81・121に示される縄文時代後期を中心とする時期である。



Fig. 40. 調査区内出土石器実測図1(1/1)



Fig. 41. 調査区内出土石器実測図2(1/1)

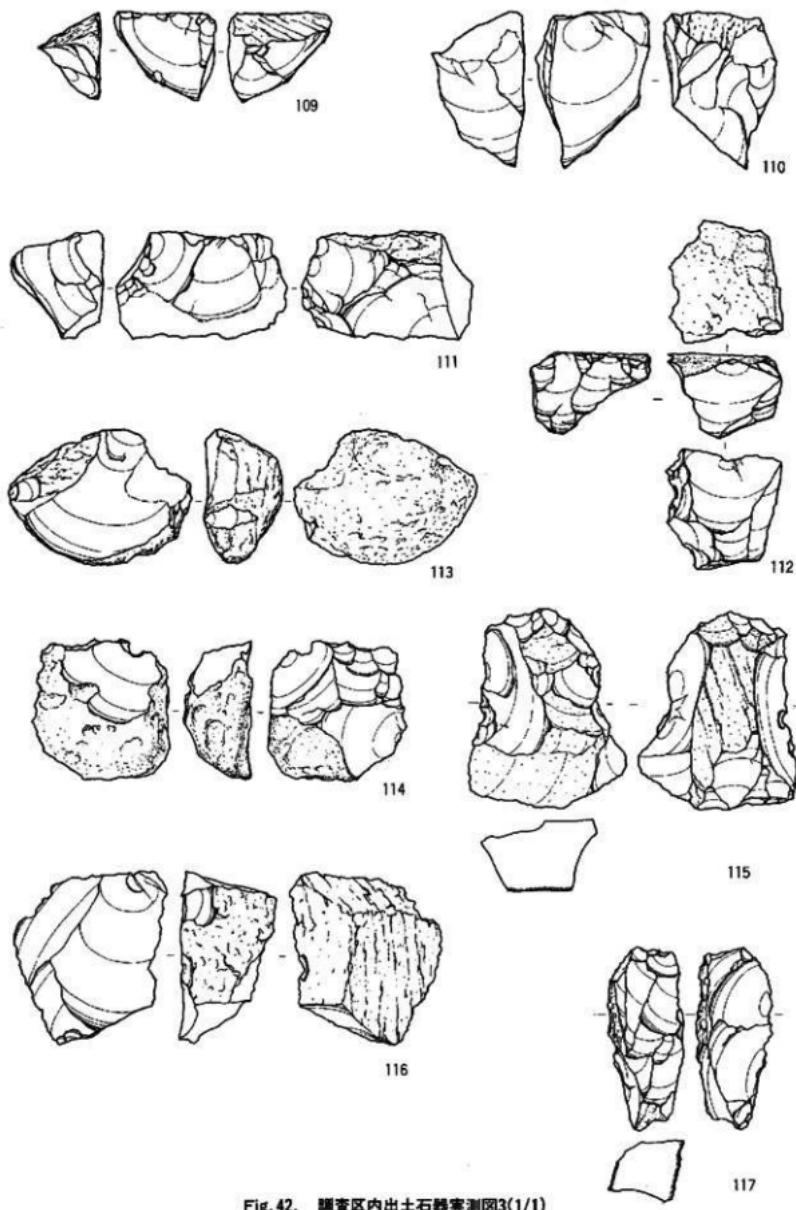


Fig. 42. 調査区内出土石器実測図3(1/1)

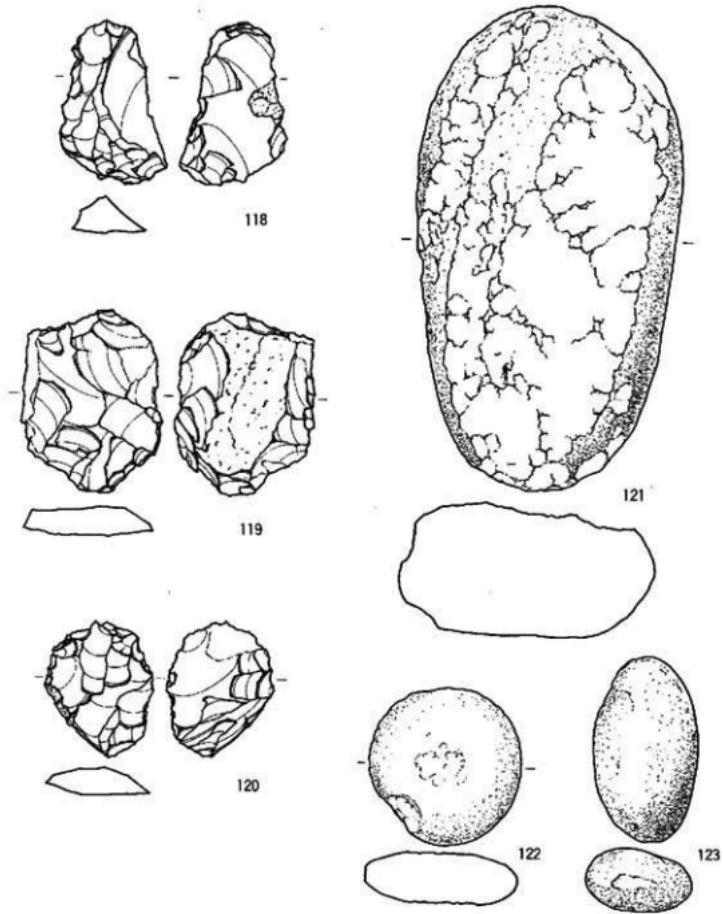


Fig. 43. 調査区内出土石器実測図4(1/1)

## まとめ

### 遺構の時期と性格

全体を通して、中世の遺構が主体を占める。個別に示すとSD01、04には12世紀後半～13世紀、SD02も陶器23、26に疑問が残るが、概ね13世紀に納まると考える。これを遡る遺物、8、30が11世紀代に含まれる可能性がある。出土遺物量からも12世紀後半以降のものが圧倒的に多く、今津の繁栄と期を同じくする。(II章参照)。SD01、02は地形変換点に位置し、丘陵から緩傾斜の段丘面に変わる部分を限るように走行し、その性格が留意される。I、II区で検出された掘立柱建物もこの時期であるが、II区においては削平が著しく、規模は判らない。沖積地III区ではSE103がこの時期に含まれる可能性がある。

近世になると、II区北端のSD24、25、III区のSD102にみられるように砂礫層を地山とする沖積台地に遺構がみられるようになる。丘陵部のII区に、この時期の集落が広がっていたかは定かでなく、遺物の大半は中世である。筑前続風土記には近辺と思われる大原村について「今津の西長濱の末増子嶺の東に少松林ありて、民家も少あり。是を大原と云。今津の枝村也。今津よりは遠し。慶安の初より立来りし所也。此の境内に大なる石窯あり。」と記す。上述のようにIII区においても中世の集落が広がっていた可能性があるが、慶安の初、17世紀初頭は規模が拡大した時期とみることができようか。

前代の遺物として縄文の石器、弥生時代中期の遺物が調査区一帯に見受けられる。I区丘陵部の尾根線を中心に遺構が検出される可能性がある。

II区北端の丘陵落ち際に検出されたSC014は5世紀中頃以降と考えられ、付近の包含層には古墳時代初頭まで遡る遺物が含まれる。当該期の集落が丘陵裾に広がるものと思われる。

### 付

調査区外であるが、古墳を3基新たに発見した。(Fig. 4)仮称2号墳の現況実測図を示しておく。径20m円墳で主体部は盗掘を受け陥没している。1号墳も2号墳と同等以上の比較的大型円墳で墳丘の遺存も良好である。なお、1号墳と2号墳の中間地点に方形の低い基壇状の高まりがある。性格は不明。

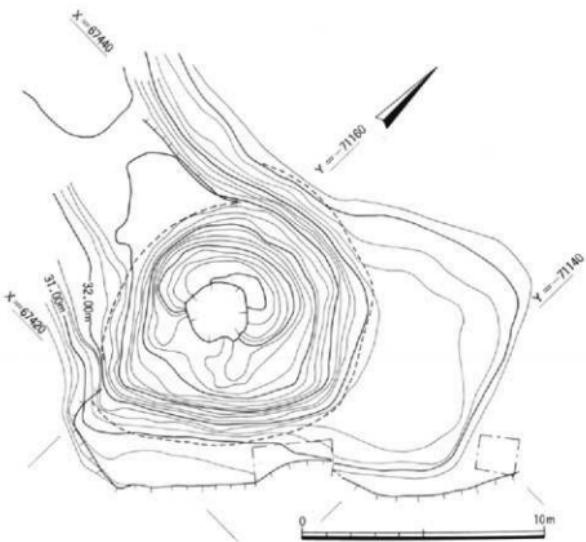


Fig. 44. 2号墳現況測量図(1/200)



Fig. 45. 2号墳現況(東から)

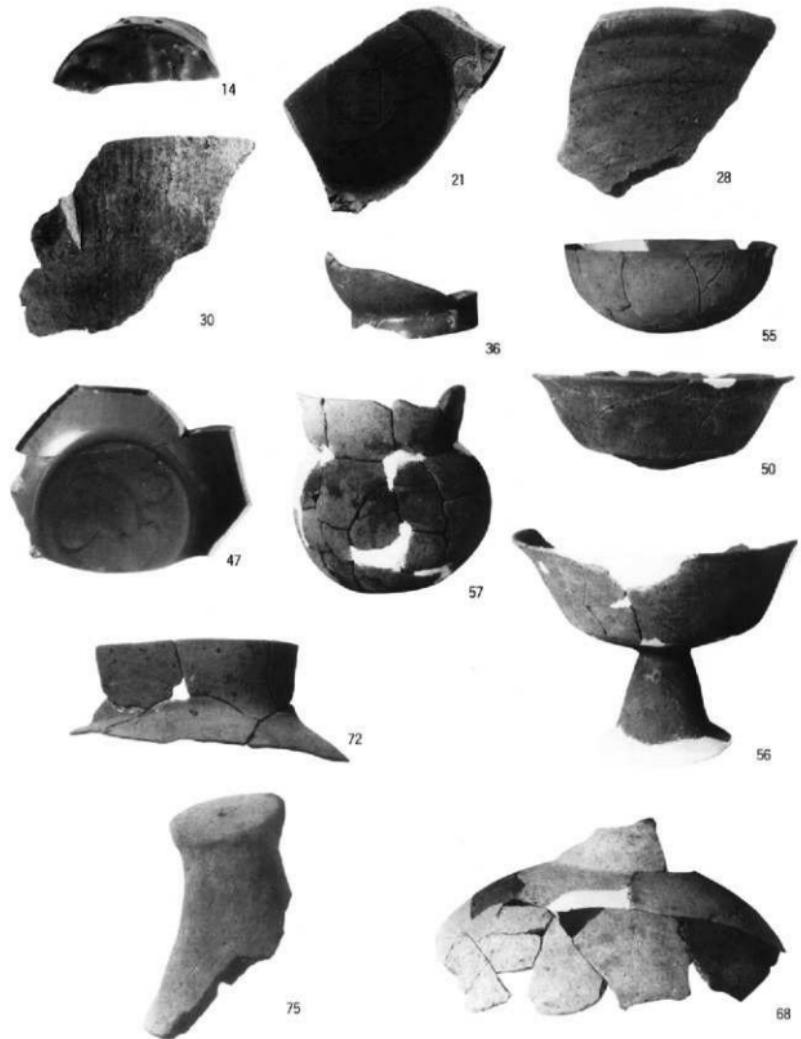


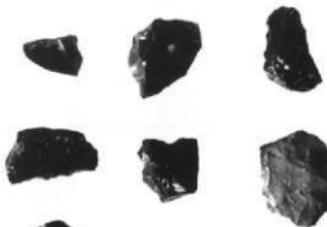
Fig. 46. 出土遺物写真!



Fig. 38, 39の図示通り→



↓



## 大原C遺跡1

－大原C遺跡群第1次調査の報告－  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第433集

1995年(平成7年)3月31日発行

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷

株式会社 玉川印刷所

福岡市中央区清川3丁目18番11号